

— 上智大学 —

2月3日 TEAP 利用入試 国語

解答

一

問一 d 問二 b 問三 f 問四 d 問五 d
問六 b 問七 a 問八 c 問九 c 問十 b

二

問一 c 問二 i = a ii = a
問三 d 問四 d
問五 c 問六 i = c ii = c iii = c
問七 d 問八 d 問九 d 問十 b 問十一 c

三

問一 d 問二 d 問三 d 問四 a
問五 X = c Y = a Z = b

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

解説

※説明の際は本文全体を通しての行数で「〇行目」というように説明箇所を示していく。この大問□本文はAが全92行、Bが全9行となっている。設問の問一～問八はA文、問九～十はB文における行数とする。

□

問一

傍線部1の説明は直後の「曰く」以降の「」内に書かれているが、選択肢を見ると傍線部の内容そのものを問うているわけではないことがわかる。なぜ筆者がわざわざ「論文調なのだ」と書いたかを考える。傍線部直前「堅苦しい」、前の行「純然たる学術報告である」とあるのでここだけを見ると「純然たる学術報告なのだから堅苦しく書かれている」という意味になり、cはすぐに×と気付けるし、残り3つの中ではaを正解としたくなる。しかし、類似表現「記事のトーンはやはり硬い」が本文57行目にあり、さらに90～92行目まで(つまりA文全体における「ポピュラー系科学雑誌の位置づけ」)を考慮すれば、傍線部は「一般向けのポピュラー雑誌なのに、学術論文として堅苦しく書かれている」という内容だと判断すべき。これに最も近いのはdで、これが正解となる。bも迷うところだが、「あくまで科学雑誌なので」が「ポピュラー系=一般向け」という意味を打ち消してしまうので×。aは「ポピュラー系なのに」という意味が出ておらずdに比べると不十分である。

問二

31行目に「誇らしく宣言した」とあるので、ザーム博士以前は「摩擦こそ抵抗の最大要因(傍線部2)」とは考えられていなかった、ということになる。また11行目にザーム博士の嘆きとして「専門家たちでさえ、良いデザインにすれば目立った摩擦を生じることではなく～推測していた」とあり、さらに19行目に「流体抵抗をもっとも少なくする」とある。つまりザーム博士以前も「摩擦」や「抵抗」については知られてはいたが、「抵抗」の最大要因は「摩擦」ではなく、「良いデザインではない」ことにある、と考えられていたということである。よってこの点に矛盾しているa「摩擦も抵抗もない」、c「抵抗には特に注意が払われていなかった」は×。さらに、ザーム博士が最初に「摩擦こそ抵抗の最大要因」だと発見したのだからd「抵抗が摩擦を要因とすることは既に知られており」は矛盾しており×。よって正解はb。bにあるように当時から「抵抗が要因であることは既に知られて」いたが、その「抵抗」が生じる理由は「デザイン」にある、と従来から考えられていたところに、ザーム博士が新たな発見として「抵抗の最大要因は摩擦だ」と説明したのである。

問三

aからfの図の中で、最も空気の流れに乱れが少ないのはfで、これが正解となる。本文34～35行目にも「このテキスト～流線形デザインの黎明期」とあり、「流線形」に該当するのはfのみである。

問四

傍線部 4 にある通り「流線形デザインの黎明期」なのだから、「流線形が主流になる(=席卷する)前」の状態である。とすれば b「流線形は～明快な印象を持たれていた」、c「既に流線形が存在していた」は×。また a では「空気を切りさいてゆきそうな形」を「良いとする」としているが、11～12 行目より本文ではマイナス内容なので×。よって正解は d。d の「感覚的なイメージが先行」「科学的～定着していない」は、流線形がまだ「黎明期」であることの説明になっている。また「科学的な解明に基づくデザイン」は 29～30 行目「空気力学実験室においてその法則性を究明しようと努めた」結果考えられた「流線形」のことであると読めるので、この点からも d が正解とわかる。

問五

傍線部 5 の 2 行前「このテキスト」では、36～45 行目にあるように「見逃すことのできない特徴」として「流線形という用語を使っていないという点(38、39 行目)」を挙げている。そして 46、47 行目にも「内容的には流線形時代の幕開けを告げるものであるが、専門用語としての「流線形」が登場する以前」とある。つまり「流線形」は「内容的」にはイメージされていたものの明確な表現としての「用語」としてはまだ登場していない(=使われていない)ということである。この内容に最も近いのは d でこれが正解となる。a と b は「用語」に触れていないので×、c も「学術的な裏付けを得る前」であることを「プレ」としている点で×。「流線形という用語がまだ使われていないから」「プレ」なのである。

問六

設問の意図を正確に読み取りたい。設問は①「図 2 が元記事の中でどのような役割を果たしていたか」を②「この文章全体の評価に基づいて」選ぶことを求めている。①については 61～62 行目「この記事は～事の次第を正確に伝えようとしている」とあり、最も近い b が正解候補に浮上する。b の「専門的」は「理論的要点は、やはり空気抵抗～盛んになってきていた(58～61 行目)」という内容にも合っている。②からは、問一でも触れた通り「ポピュラー系雑誌である」という前提を踏まえて答えよ、という設問の意図であることを読み取るべき。よって正解の選択肢なら「ポピュラー系雑誌なので、専門的実験の結果であるという事実をより正確に伝える(=ポピュラー雑誌だから専門性が低いということはない、と伝える)ための図である」と言うべき。この内容に最も近いのは b であり、これが正解。a「数学的解析の理解」、d「写真撮影の初の成功」が設問の「この文章の評価に基づいて」という要求に合わないので×。c は問五との関連で迷ったかもしれないが、「流線形という語を導入する」ことが目的なら、「この記事が「事の次第を正確に伝えようとしている(61～62 行目)」ことを目的としているために合わない。やはり正解は b である。

問七

「何と何が同じなのか」=共通点を読みとると、車体のシルエットを「卵型に似た」と表現したことと、空気の流れを「淀みない川の流れのように」と表現したこと、である。ともに 68 行目「学術用語と比喩表現とが渾然としている状態」の中の「比喩表現」側の説明である。そして、その「比喩表現」を用いる目的は 83 行目「イメージを喚起」するためだ、と読み取れる。これが両者の共通点である。さらに 87～91 行目を見ると「比喩」や「イメージ喚起」は「一般読者向け」だと書かれている。この内容に最も近

いのは a で、これが正解。b「専門用語を避け」は 68 行目「渾然としている」に矛盾するので×、c はそもそも文意が通らない(「卵型に似た車体後部」と「淀みない川の流れ」が「同じ形態」であるはずがない)ので×、d は「共通点」を「抵抗がもっとも少ない」としている点で×。

問八

「真骨頂」とは「そのものの本来の姿」という意味である。この意味になるのは c のみであり、これが正解となる。本文の「真骨頂」は、「ポピュラー雑誌だからこそ、学術用語だけでなく一般読者にもわかりやすい比喻を用いた日常的言説で書くことができる」ということである。つまり「ポピュラー雑誌にしかできないことだ」という意味になるので正解も c だとわかるのである。a「理解が困難」、b「最も強く主張」、d「最高峰として最も優れた」、はいずれも「真骨頂」の意味にならない。

問九

傍線部 8 直前の文に「素人に説明するにあたって、比喻表現を使わなかった最初の記録だ」とある。また 1 行目にも「流線形という用語もしだいに市民権を得ていった」と書かれている。ということは、傍線部の「流線形という用語がそれ自体として発信力をもった」とは、「流線形という概念が浸透し、比喻を使わなくても、多くの一般読者、素人に通じるようになった」ということだと判断できる。a 前半は、素人が「学術的な用法の理解を踏まえて」いることになるが、本文に明記がなく判断不可能であるし、後半の「用語自体が独自の訴求力を持つ」も、「比喻を使わなくても素人に通じる」説明にならず×。b は「学術的な用語」ではなく、「流線形」という概念、および語に限定しなければならず×。c と d の違いは、「流線形デザインのもつ合理性が理解される」か「流線形デザインであること自体に価値を見出す」の違いである。つまり、流線形デザインの、“合理性に対する理解が一般読者に広がった”のか、“それ自体に一般読者が価値を見出すようになった”のか、の違いである。上記傍線部の意味に d はそぐわないため、解答は c である。

問十

図 4 の「消える比喻表現」とは、問九でも触れた通り「流線形という用語自体が浸透し、比喻を使わなくても、多くの一般読者、素人に通じるようになった」ということである。つまり、「流線形」という言葉をわざわざ「比喻」を使って説明しなくても素人に認識されるようになった、ということである。よって正解は b である。a は「実験室の図像による比喻」と「現実の自動車の図」を比較してしまっている点で、「学術用語」と「比喻表現」という本文の比較内容と視点が異なるので×、c は「自動車の流線形」「形状」という「形」の話になっており、「比喻表現」の話ではなくなっているため×、d の「渦巻き」「旋回」は A 文 75 行目より、そもそも本文中では「専門用語」として使われており、選択肢にあるように「比喻」ではないので×。

《□ 総評》

TEAP 日程らしく、題材が物理学の内容で図を使い、その意味や働きを問うものだった。この意味で例年の形式と変更はない。設問の問い方、選択肢のつくりから傾向の変化は感じられない。残りの上智現代文も例年通りと予測する。設問で難しいのは、問二と問六と問九。正答率は 50% を下回るだろう。学部

学科によるが、現代文における合格ラインは 8~9 正解(1 or 2 か所×)だろう。設問に条件が付いていて、そこをよく読み、考えることが大切になっているので、残りの上智受験日程が残っている生徒は、そこを注意してほしい。



[出典解説]

『撰集抄』(せんじゅうしょう)は、鎌倉時代の説話集。作者未詳(西行の作だとされたこともある)。文中にある詩Ⅰ、詩Ⅱはともに『菅家後集』(かんげこうしゅう)にあり菅原道真の作。詩Ⅲは古今集真名序(まなじょ)にあり、紀淑望(きのよしもち)の作である。『菅家後集』は、大宰府に流された道真が、死に臨んで自らの詩を集め、詩友の紀長谷雄(きのはせお)に贈ったものであり、いわば遺言詩集のようなものである。

[詩Ⅰ(菅家後集「聞旅雁(旅雁を聞く)」)の書き下し]

我は遷客(せんかく)為(た)り 汝(なんぢ)は来賓(らいひん)
共に是(こ)れ 蕭々(せうせう)として旅に漂(ただよ)ふ身
枕を敬(そばだて)て帰り去る日を思量(しりょう)すれば
我は何(いづ)れの歳か知らん 汝は明春

[同口語訳]

私は流罪によってこの地にきた者 お前は招待客
お互いものさびしく旅の空にさまよう身の上だ
(だが)枕を傾けて故郷に帰る日のことを考えると
私はいつになるか分からないが お前は来年の春だ

[詩Ⅱ(菅家後集「五言 自詠」)の書き下し]

(起句)家を離るる三四月(げつ)
(承句)涙を落とす百千行(かう)
(転句)万事(ばんじ)皆夢の如(ごと)く
(結句)時々彼(か)の蒼(さう)を仰(あふ)ぐ

[同口語訳]

旧里を離れてから三四か月が過ぎ 涙を流すことは数百数千(数えきれぬほど泣いた)
過去のことはずべて夢のようで 今は時々あの青い天を仰ぐだけである

[設問解説]

問一

雁は北方からやってくる冬の渡り鳥であり、秋になって最初に飛来する雁を初雁という。「初雁(はつかり・はつかりがね)」は秋の季語。

問二～問四

〔詩Ⅰの書き下し〕並びに〔同口語訳〕も参照のこと。

「我」は道真であり、「汝」(=お前・あなた)は雁である。私(=道真)は流罪なのでいつになったら旧里に帰れるのかわからないが、渡り鳥であるお前(=雁)は翌年の春になればまた故郷の地に戻れる...と、我が身と雁を対比しているのである。「遷客」の「遷」は「左遷」の「遷」であり(cの「解雇」では少し意味が違う)、「来賓」は現在でも「招待された大事な客」の意味で使われている。

問五

空欄を含む文の末尾は「しか」と已然形になっている(=「しか」は助動詞「き」の已然形)。係り結びが成立しており、ここでは「こそ」が入る。

問六

〔詩Ⅱの書き下し〕並びに〔同口語訳〕も参照のこと。

i = 故郷のことであるが a の「北野」では限定され過ぎている。都(全体)を指す...と考えればよいであろう。ii = 「蒼」は「蒼(あおい)」。仰いでいるのは「蒼い空」と予測できる。本文(撰集抄)のはじめの方に出てきた「雲井」も「雲が居(いる)」ところで、空...である(雁という鳥がいるところなのだから、空...と考えてもよい)。iii = 詩Ⅱの形式は五言絶句である(=よって d は消去)。五言絶句では承句末と結句末は脚韻を踏む(=よって b も消去。または音読みしたときに「行(コウ・ギョウ)」と「蒼(ソウ)」は似ていると気づく...というのでもよい)。a の「数による対」は言えそうだが、詩Ⅱの転句と結句を見て「対句」ととらえるのには無理がある。よって「正しく述べていない」ものは c となる。

問七

「応和」の元号に注があるのが最大のヒントになる。これは道真の死後二十数年が経過したのちのことである(なお道真の没年も注にある)。道真が亡くなってだいぶ時間が経ってから中国より(逆輸入のような形で?)この漢詩が入ってきたこと...についての撰集抄作者の感想としてあり得るもの、また文脈上ふさわしいものを選べばよい。仮に c だとすれば「中国でしか理解できない隠語」を本文から読み取るのには無理がある(なお参考ではあるが、これは実際に誤りである)。

問八

「秋津州」は、日本の古称(狭義には「大和」の古称である)。d「我朝」の「朝」は、朝廷・国の意。

問九

延喜の御門(=醍醐天皇)は、古文では、かなりイメージのよい天皇で、「延喜の治」は、善政の代表例のように扱われる。「仁流秋津州之外(仁は流る秋津州の外=帝の大御心は秋津州の外まで届く...ということ)」という称賛を人々から「言はれ」ているのである。よって「れ」は d の「受身」と解釈することになる。

問十

ここでは醍醐天皇が「北野」(=道真)を「遙かの境」(=つまり b の「西国」)に流罪にしてしまったことを指す。

問十一

問九解説で述べたように、延喜の治は善政...という前提である。しかしながら、そのように素晴らしい(はずの)醍醐天皇も、道真の左遷に限って言えば政治的判断を誤ったのではないか...というのが撰集抄作者の考えだったわけである。

三

[詩IVについて]

『香炉峰下 新たに山居をト(ぼく)し草堂初めて成り 偶東壁に題す』。白楽天(白居易)の作。日本では枕草子に引用されていることでも有名である。

[詩IVの書き下し]

日高く睡り足れるも猶(な)ほ起くるに慵(ものう)し
 小閣衾(しとね)を重ねて寒を怕(おそ)れず
 遺愛寺の鐘は枕を敬(そばだ)てて聴き
 香炉峰の雪は簾を撥(は)ねて看(み)る
 匡廬は便(すなは)ち是れ名を逃るるの地
 司馬仍(な)ほも老いを送るの官為(た)り
 心泰(やすら)かに身寧(やす)きは是れ帰処
 故郷は独(ひとり)り長安に在(あ)るべけんや

[同口語訳]

もう日はすっかり高く、十分に眠ったというのに、なお起きるのがかったるい。小さな部屋で布団を重ねて寝ているので寒さの心配はない。遺愛寺の鐘は枕を(したまま、少し頭を)ずらして聴き入り、香炉峯の雪は簾を引き上げて眺める(までのことだ)。ここ廬山は名利や名誉を求めず引きこもるにはちょうどいい。司馬という役職も、老後の隠居生活のためにはうってつけだ。心が落ち着き、体も安らかなら、それこそ帰るべき場所なのだ。故郷はなにも長安だけというわけではない。

[設問解説]

問一

「敬てる」は「(耳を)そばだてる」であるが、ここでは前後の言いたいことを考えて、布団から出ないままに(つまり、寝転がったまま、頭を枕から少しずらして鐘が聴こえるようにしただけ...)という状況を読みとることがポイントである。

問二

詩 I と詩IVの最大の対比ポイントは、詩 I (道真)=左遷を否定的にとらえている(=旧里に帰りたい)、詩 IV(白居易)=同様の状況に対して肯定的(=帰る場所は何も都である長安でなくてもよい)。このギャップが表現されている選択肢は d しかない。

問三

前問(問二)解説も参照。白居易はこの新天地(廬山)を身を落ち着ける場所と考え、都(長安)には帰らなくともよいが、道真の願いは何としても旧里(都)に帰ること...なのである。

問四

b「帰去来」は陶淵明の有名な詩であり消去できる。また c・d を積極的に選ぶ根拠は特にない。

問五

問五の設問に引かれている古文は「大鏡」の一部である。また古文(大鏡)の中にある漢詩は道真の作である。

X=直前の文字「看」は「看(みる)」なので、何を「みた」か「大鏡」から探せばよい。

Y=直後の「鐘声」は当然「きく」ものだから「聴く」または「聞く」であるが、c「聞」では白居易の詩(詩IV・「聴」の字が使われている)を踏まえたことにならなくなってしまふ。Z=前述の「詩IVについて」、また本問のここまでの解説を参照のこと。

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

増田塾 2019 解答速報ホームページ



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！